（善隣・保護者の会）

泉の会だより

善隣幼稚園で定期的に開催している保護者の集まり「泉の会」では、園長が、子育てや幼児教育について大切にしたい考えや想いをお話しする場を持っています。

＜泉の会だより　vol 4＞

”ひとりでいるのがこわくなるようなたくさんの友達よりも、ひとりでいてもこわくないと思わせてくれる何かと出会うこと”という紹介文に惹かれて、角田光代さんの「対岸の彼女」という小説を読みました。

善隣は小さい幼稚園。小学校にあがった時にひとりなってしまうのでは。という心配の声をよく聞きます。確かに善隣幼稚園は 1 学年 20 人ほど。小学校のクラスに善隣生はひとりだけ、というシーンは珍しくありません。

小学校に行くと、最初は戸惑うこともあるかもしれませんが、善隣生は自分に出会う経験ができているから、ゆっくりと時間をかけて楽しんでいくことができるので大丈夫です。いつもそうお答えしています。

ひとりでいてもこわくないと思わせてくれる何か、とは、「人と同じことができなくてもいい。人と同じ遊びをしなくてもいい。」と思えることや、誰かと一緒にいなくても安心していられる時間を過ごした経験です。自分に出会えているということは、自分はこのままで大丈夫と思えること、自分を肯定し、認めることができることなのです。

善隣幼稚園は、そういった心の育ちに重きを置いています。例えば幼児期前期の「自律性」を身につける時期には「すぐにできるようにならなくてもいいんだよ、というメッセージを伝えながら、大切なことをコツコツ繰り返し教えてあげること。ちゃんとできるようになるまで、いつまでも待っていてあげる。何回でも教えてあげるという気持ちを子どもに伝えること。」が大切であると、この本（※）に書いてあることがまさにその通りだと思っています。積み木を投げるな、と厳しく叱っても教育的な価値は生みません。禁止してもダメで、穏やかに、何度でも言ってあげる。

同じような失敗や、同じような経験を繰り返す中で、できるようになった部分を見つけて、認めて、その部分を褒めてあげる。こういったひとつひとつのコミュニケーションが子どもの自己肯定につながっていきます。そして、その積み重ねが自分との出会い、自分の力を信じることにつながります。このような考えを基礎に世界中の教育学・保育学がなされてきました。子育ての励ましとして、この考え方に信頼をもって心に留め、子どもたちを温かく見守っていきましょう。

※『子どもの心が見えてくる』佐々木正美著を引用